

特集／アルコール依存症の精神医学

はじめに

加 藤 伸 勝

元来、精神医学の本流を歩む臨床家や研究者の関心は内因性精神病や神経症に向けられ、アルコールや薬物依存の臨床や治療に手を染める精神科医は少なかった。

アルコール依存症は、対象患者が多いわりには、その臨床像がとらえにくく、また治療面でも有効な手段も乏しかった。さらに、依存者をめぐる社会心理面の複雑さもあり、疾患として生物学的、または心理学的次元で対応できないもどかしさがあり、biopsychosocial disorder として精神医学の中で特殊な位置を占める疾患である。したがって、アルコール問題に立ち入る精神科医は思慮の浅い精神医学のアウトサイダーの評があった。今日でもその評価はあまり変わっていない。

人口比の中で、比較的一定の発生率を示す疾患と違って、アルコール依存症は、その発生率において流動的である。わが国においても、酒類消費量の増加率は社会の変動に依存して増減してきた。しかし、近年、酒類の生産量は単に社会経済の原則にのみ関連するばかりではなく、社会構造との関連において増減する傾向が表われてきた。豊かな経済力を持つ社会であっても、思想的な貧困社会においては、アルコール消費量が増大し、経済的に貧困な社会においても増加するという逆説的増加傾向さえ見られる。いずれにしても酒類消費の増加はアルコール依存症の増加の結果を招来する。そうした社会病理の副産物として発生するアルコール依存症とその依存症者によって引き起こされる社会問題の対処へのニーズは最近とみに高まりを見せてきた。

“不思議なこと”に、これに相応するかのごとく、年を追って、アルコール依存症に取り組む臨床家や研究者が増えはじめた。社会的要請に答えての増加であるならば、何も不思議がることもあるまいと反論されるかも知れない。しかし、前述したように精神医学のアウトサイダーが増加する

ことは、やはり不思議な現象なのである。

その理由が奈辺にあるか詮索する気はないが、あえて述べれば以下のようなことも挙げられる。

精神医学の本流の高踏性や仮説の累積の中でむなしい臨床経験を重ねることに反発する若い臨床家達が、たとえ試行錯誤の連続であっても、臨床経験として真実性に富むアルコール依存症に取り組み始めたのであろう。

ある若い精神科医は、「医師・患者関係においても、精神病におけるよりも直接的であり、己れの心をそこに見る思いがして、そこに生ずる緊迫した人間関係がたまらない魅力である」と語ってもしいる。筆者はここにアルコール依存の臨床が、精神医学の中で着実に市民権を得つつある姿を見える。

さて、この時に当たり、「アルコール依存症の精神医学」の編集企画が示された。

ここに掲載される特集は、東京都精神医学総合研究所が主催されたシンポジウムが基調になっている。そのシンポジウムは、昭和 56 年 12 月 19 日に一般公開として野口英世記念会館で行われた。前述した理由によるのか、参加者に若い臨床医家も多かった。そればかりでなく、臨床心理畑の方や断酒会の方も参加され、盛会であった。東京都精神医学総合研究所が、このテーマ以上にアトラクティブな主題が山積する中から、これを選ばれた卓見に敬意を表するものである。アルコール依存の精神医学的問題のすべてをこの特集に盛り込むことはできなかったものの、そのエッセンスを盛り込んだ点で编者として満足している。

本特集は、シンポジウムの原稿に加筆していただいており、専門家向けに推敲されているので、読みごたえがあり、読者のお役に立つものと信じて疑わない。

(京都府立医科大学精神医学教室)